

シリーズ

新・漁業人

取締役
有限会社 泉澤水産

泉澤光紀こうきさん

父の背中を追い定置網の世界へ
5代目網元めざして
現場修行に打ち込む日々

有限会社 泉澤水産

所在地 ● 岩手県釜石市

設立年 ● 1999年

漁業種類 ● 定置網、養殖

従業員 ● 100人

URL ● <https://www.izumisawasuisan.com/home>



上) 泉澤水産の「清水丸」に乗る光紀さん
下) 「待ちの漁業」の定置網には海流にのり、四季折々にさまざまな魚が入る



海の奥深さに目輝かす

宮城県女川町市場通りの漁港岸壁。眼前に広がる三陸の大海原で糧を得るべく、夜明け前からあまた集う腕利きの漁師たちに混ざり、ひたむきに技術と知識を学ぶ若者がいる。泉澤光紀さん(30歳)だ。

戦前から続く定置の網元・泉澤水産の5代目を担う立場だが、けん引役となるには「現場を知る。それが大前提」と肝に銘じ、信頼に足る実力が備わるまで一介の乗組員として下積み作業に打ち込むと心に決めた。

2021年4月に入社しそれから1年半余り、毎朝3時に起きて船に乗り込み、仕掛けた網の引き揚げやかかった魚の捕獲、その手入れや選別などに汗を流す。自然相手のなりわいは決して楽ではないが、魅力を問うと「とれる魚が毎日違う。単純なことだが本当に面白い」と海の奥深さに目を輝かす。いわゆる漁師冥利も満喫しているようで、漁を終えた後に船で食べる魚料理が「最高にうまい」とにっこり。お気に入りにはタチウオの塩焼きだそう、あまりのおいしさに「つい食べ過ぎてしまう。おかげで少し太ってしまった」と苦笑いする。

子どものころから、漁業が身近にあったからか、誰に何を言われなくとも、水産系の大学に進学すると決めていた。北里大学と東京海洋大学大学院で学び、卒業後は国立研究開発法人の水産研究・教育機構に勤務し、家業の定置網に関する研究に携わった。

定置網は、一定の場所に網を設置して獲物をねらう漁法。まき網や底引き網、一本釣りなどのようにみずから魚群を探し求めることはなく、決まった場所で決まった時間に網を引き揚げる。現場にも幾度となく足を運び、専門知識は「相応にある」と自負していた。

しかし実際にやると「想定外」「わからない」の連続。海はほんの数分で様子を変えることがままあった。作業中でも潮の向きや波の高さに合わせ、船の位置取りや網の寄せ方を変える必要があった。そうした詳細な現場実態は「過去に読みあさった研究書などには記されていないかった。なりわいにして初めてわかった」と経験の重要性を実感する。覚えるべきことは今もまだ「たくさんある」と自覚。同じ船には技術と知識に優れた40〜50歳代の中堅が数多くいるそうで「しっかり学んで成長したい」と決



父で社長の泉澤宏さんと光紀さん

意を新たにする。

漁場増やし経営を安定

泉澤水産は全国10カ所の漁場で定置網漁業を大規模に展開しているが、光紀さんの父で4代目として舵取りする宏さん(60歳)によると、もともとは本拠地を置く岩手県釜石市の湾内で「細々と数カ所営む程度」だった。

転機は自身が家業を継いだ1988年。地元では秋サケの豊漁が続いていたが、勢いづいて一辺倒の経営にシフトしていく関係者を見るにつけ「とれなくなったらどうなってしまふんだらう。単一魚種に頼り切っては危うい」との思いが

募った。確かに経営者とは常に最悪を想定して備えるべき立場。しかし誰もが沸き立つ中で冷静さを保ち、リスク分散にまで考えをめぐらすことは容易でない。

宏さんいわく「悲観的な性分」によるそうだが、周囲をよそにいち早く対策を模索。具体化へ本腰を入れ始めたころ「宮城県石巻市の金山漁場に空きがあり、サバやイワシがとれる」との情報を耳にし、すぐさま動いて5年後に初の県外進出を果たした。以降も同じ宮城の女川町、静岡県熱海市、北海道の積丹町、高知県の室戸市などへ矢継ぎ早に進出した。当然ながら場所ごとにとれる魚と盛漁期、つまりは収入のピークが異なるため、会社全体としての波が少なくなり「資金繰りが安定した。リスクヘッジできた」と大きくうなずく。本拠地・釜石市では2年前から海面養殖事業にも挑戦。定置網とはまったく違うノウウハウが求められるが、不漁続きの秋サケに代わる収入源とするべく、高級魚サクラマス育成技術確立に取り組んでいる。



漁獲した魚は近くの魚市場に水揚げする

にも「大した苦労はなかった。新しいことに挑戦するのが好きなのでむしろ楽しかった」とこともなげに振り返る。ただ、どこへ飛び込むにも「決して全否定しない。それだけは心掛けた。誰しも誇りと自負があるから」とかみしめるように強調する。

今後も事業拡大をめざしはするが、やり方としては「何もかも自前」でなく、同じ考えを抱く若手経営者との「連携」を構想。そうやって志を一にするグループが形成できれば「膨らむ漁具の購入費、不足する人手の確保などで助け合いながら相互発展できる」と確信する。その対象は水産業界に限らないとし、飲食業であれ宿泊業であれ「意

欲ある人たちのアプローチは大歓迎」と熱っぽく語る。柔軟な発想をする背景には漁業者数が減り続けていることへの強い危機感があり、このまま成り行き任せでは「日本近海からの食糧供給が近い将来、間違いなく滞ってしまう」と警鐘を鳴らす。

定置は「誰でもやれる仕事」

人手不足は国内産業の共通課題。漁業における深刻さはことさらだが、定置網の仕事内容であれば「人を呼び込める可能性が十分にある」と見ている。朝は若干早い網を引く揚げる所要時間は網の大きさ、かかった魚の多少などにより異なるが、おおむね3〜4時間と



漁獲した魚を運ぶ光紀さん

いったところ。その分終わりは早く、始業も終業も毎日ほぼ定時。宏さんは「急な休みも取れる。家族優先で働ける職場」とアピールする。

腕力もさほど必要ないそうので、実際に室戸の漁場では女性が勤務クレーン操作を任せるほどの貴重な戦力となっており、大げさなく「どんな人でもやれる」のが定置網だという。その魅力と特徴を「声を大にしてPRしたい」と意気込む。行政・関係団体にもさらなる後押しと希望者の窓口役を期待する。

喫緊の課題は魚価安。日本でも物価高が問題になっているが、国産鮮魚に関しては今なお低迷し続ける種類が少なくない。理由はさまざまあるが、いずれにしても生

産コストはどんどん膨らむだけに「厳しいよね」と渋い表情。値を付ける側の仲買人に「物価高の苦しみは一緒」と理解を示しながらも、継続生産には「底上げが必須」と訴える。

行動派の宏さんらしく、ここでも他力本願ではなくみずから行動する。いろいろ試したが、最たるものは都心に居酒屋「あじろ定置網」を開き、浜で売れ残るマイナーな魚を絶品料理に仕立てて提供した取り組みだろう。それが期待以上の人気となり、後を追ってメニュー化する店が続出した。結果的に需要が安定し、相応の値で取引されるようになった魚がエイを筆頭に「いくつもある」という。

最近「海の変化」も気掛かり。原因は定かでないが、全国的に潮流の速い日が増え、操業の見合わせを強いられたり、ロープが切れたりする被害が多発化傾向にあるという。かつては盆前からの半月余りに限った現象だったが、近年は秋になっても収まらず、年末さえ「流れが速くて網を起こせない日がある。自然相手なのでいかんともし難いが、ものすごい痛手」と頭を悩ます。

声高に叫ばれる資源管理への意識も高い。定置網はみずから魚を追うことのない「待ちの漁業」であるため、すでに「資源負荷が少ない」「環境に優しい」との評価を得ているが、それでも「年間だと漁獲量はかなりの高水準。自分たちだけ違う土俵とはいかない」と自覚する。

「待ちの漁業」ゆえに操業と管理の両立は極めて難しいが、どんな手法で実施するにしても「漁業種問わず、みんなが同時にしっかりと取り組まなければ効果はない」と指摘する。

さらなる「改善」に意欲

現場で経験を積み、仕事を知るほどに「父のすごさを感じる」と話

す光紀さん。今はまず海になじみ、現場の従業員と同じことができるようにならないといけない、とみずから「修行中」と位置付ける。直面する課題には強い危機感を抱き「資源管理も魚価向上も大事。やらなければ未来はない」と話す。とりわけ心配するのが人手不足だ。

長く外国人材に頼ってきたが、猛烈な勢いで進む円安に「この先も来てくれるかわからない」と懸念する。そうなると日本人をより多く集める必要がある、そのためにもっと漁業を知ってもらふ必要がある。漁業の中では「優良」とされる労働環境を「もっと働きやすくするしかない」と考える。

夢見るのは機械化などを通じて老若男女問わず、誰でも楽にできる仕事にすること。すでに当社の漁場では女性が勤務している実績があるため、もっと女性も漁業へ進出してほしい。これが実現できれば「経験はほぼ無用になり、新規就労者がより集めやすくなる」と確信する。父の背中を見て育ち、ひたむきに経験を積む青年がどんな経営者となるのか。その行く末が楽しみだ。

（日刊水産経済新聞 小野寺昭彦／文 千葉大志／撮影）